
Reproduction、あるいは私生児になること

——『生死』講義第4-6回へのコメント

吉松 覚

本稿は2023年4月22日に金沢大学でおこなわれたワークショップ「ジャック・デリダ『生死』講義を読む」での発表に基づくものである。筆者が翻訳を担当した第4-6回の各回に、コメントをしながら解説をしていき、最後に問題提起をするという構成になっている。

1. 第4回

『生死』講義の第4回から第6回にかけての議論は、第3回までにすでに予告されていたフランソワ・ジャコブの著作『生きものの論理』の読解を中心に構成されている。とりわけこの講義録において興味深いのは、デリダが直接的に同時代の科学書を直接的に読解対象とすることが珍しいということだけではない。ジャコブもまた、遺伝子情報を一種のテキストとみなし、テキストとしての生命という考え方を構想しているという点である。しかし、デリダはジャコブ読解の冒頭から、ジャコブにおけるテキストと生命の関係性、その距離と、自らの思考におけるテキストと生命の関係性についての一定の留保を挟んでいる。

「現代」の生物学者が、自らが専攻する科学について書いたテキストにおいて(…)、これ以上なくはっきり読み取れるもの(…)それは以下のような事態です。すなわち、彼はテキストの外にあるものについての、つまり非-テキスト的なものについてのテキストや、またその存在や構造において、いくばくかのテキスト性とは無縁な性質をもつ指示対象を形成するものについてのテキストを書いていないということ。しかしそれとは反対に、彼はテキストについてのテキスト、いくばくかのテキストについてのテキストを書いていて、それによって自らの対象はテキストの構造を持っていることを示し、思い起こさせ、書いているということ。そして科学的な対象としての自らの科学もしくは研究の対象には、メタテキスト的なものはもはや存在しないということです。¹

この講義に先立つ1967年刊の『グラマトロジーについて』において、デリダはすでにサイバネティクスと原エクリチュールの関係について言及している。それゆえに、エクリチュールないしテキストについて論じる生命科学は格好の読解対象であったことだろう。しかし、テキスト(と

¹ Jacques Derrida, *La vie la mort, Séminaire 1975-1976*, Seuil, 2019, p. 109-110. 『ジャック・デリダ講義録生死』吉松覚、亀井大輔、小川歩人、松田智裕、佐藤朋子訳、白水社、2022年、103頁

しての生命) もしくは (テキストとしての) 生命についてのテキストを書くことはできるのか、そしてテキストは生命を記述するためのモデルたりうるのか。デリダはこれらの問いを常に念頭に置きながら、ジャコブの論述——とはいえ、『生き物の論理』の、DNA の発見以降の章における論述に読解対象は限られているが——を読み進めていく。

まずデリダは、〈テキストとしての生命についてのテキスト〉の読解のための導きの糸を二つ提示し、それらに沿って読解することを宣言する。第一に、「イメージ、類比、比喩、モデル」というライン、第二に「生殖=再生産(reproduction)、コピー、複製」というラインである。とりわけ reproduction はこの講義全体のテーマであると同時に、ジャコブが生物を他の事物から分けるもの、「生きているシステムの内在的性質」(112 頁) としても定義しており、重要である。そして第 4 回ではとりわけ生殖について検討されている。

ジャコブは機械論を採用することで、生命の背後にある^{フッシュケ}魂のような形而上学的なもの、そして生氣論的なものを排除しようとしている。しかし、生命を特徴づける力のようなものを提示することには否定的でありながらも、ジャコブには生殖こそが生き物の本質であるかにも読める記述がされている箇所も見られる。

ジャコブは本質についての哲学的な言説とただ単に袂を分かっただけでなく、彼は生殖する傾向および生殖への性向としての性の本質とともに、存在の力学やエネルギーとしての本質の根源や目的を——いわば本質だけでなく、本質の本質性を——再発見したのです。²

なお、引用中に登場するエネルギーという問題系も、このセミナーにおいて繰り返し問われる問題である。第 4 回においてデリダは熱力学や自由エネルギーについても触れているが、第 11 回で参照されるジャン・ラプラシユ『精神分析における生と死』でも、フロイトにおける自由エネルギーの問題が論じられている。実際第 11 回ではまさにラプラシユ名が挙げられ、ラプラシユの議論への目配せもされていることも注目しておきたい³。

そして本題としての生殖という問題もさらに掘り下げられていく。デリダはジャコブが *supplément* という語で死と性を形容していることに注目する。まさに *supplément* とは、デリダが『グラマトロジーについて』以来用いてきた語であった。性と死はいかにして生を代補するのか。第 5 回では、この生とその代補という問題が展開される。

2. 第 5 回

第 4 回講義でも予告されていた通り、第 5 回では (同じものの) 再生産というテーマに沿って進められていく。デリダは以下のように述べている「自己の同一性、もしくは自己から自己への同一性は、何がしかの再生産可能性なのです」(126 頁)。この再生産というテーマは、前年度

² *Ibid.*, p. 121. [『生死』 114 - 115 頁]

³ *Ibid.*, p. 289. [『生死』 275 頁]

の講義『理論と実践』においても取り上げられていたものであり、第5回講義でもマルクス主義における生産／再生産の問題についても触れられている。しかし、「生死」というテーマにおいて注目すべきは、やはり生物の生殖＝再生産（reproduction）であろう。ジャコブはまさに、全く同一のものを再生産する、バクテリアの単性生殖をモデルにして生殖を思考しようとしているかに見える、とデリダは分析する。そこで鍵となるのが、代補としての性^{セクシュアリテ}（交）と死である。ジャコブは以下のように述べている。「雌雄性^{セクシュアリテ}は生殖における一種の補助手段 [auxilaire]、ある余分のもの [superflu] である」⁴。つまり、性（交）とは本来は不要なものであると記述されている。死も同様である。すなわち、「小さなバクテリア細胞は、その系全体が20分ごとに一回程度で増殖できるように組み立てられている。バクテリアにおいては、増殖が有性的でなければならない生きものとは反対に、その出生は死によって補償されていない」⁵。死に補償されない生。つまり生命は死を経験する必要がないと言うのである。こうした生きものが「死ぬ」ようなことがあったとしたら、それらは事故によってしか死なず、分裂して同じ個体を作り出すことを規範にしているとデリダは述べるのである。このジャコブの思考に対してデリダは以下のように分析する。

雌雄性と死は、ジャコブによると唯一の「代補」です。バクテリアもまた、有性生殖を知らないかぎり […] この性を持たない […] バクテリアは死ぬことはない、とジャコブは述べます。⁶

ちなみにバクテリアの生殖において、細胞は分裂前が母細胞、分裂後が娘細胞というように同性で表象されていることもデリダは指摘している。デリダの読みでは、ジャコブの論述を敷衍すると、あたかも雌雄性^{セクシュアリテ}が生きものの生を有限化している、単性生殖のバクテリアたちは無限の生を得ているかのようなものであるという考えにさえ行き着いてしまうとされる。

有性生殖／単性生殖という対と、有限の生／無限の生、死／生についてのデリダの分析は、ジャコブの書物の分析にとどまらない。この講義ではヤコブの階梯の伝説までもが言及されている。この伝説は旧約聖書に収められているもので、天まで届く梯子について語られている。ヤコブは一族の嫡子の地位を奪ったことで兄に命を狙われるのだが、その道中の夢で、天まで届く梯子を夢見る。そこを行き来する天使には性器がないこと、そしてジャコブ (Jacob) とヤコブ (Jacob)、日本語では異なる表記だがアルファベット表記においては同じであることに注目して（少々言葉遊びのようにも思えるが）、デリダは生と性と死についてさらに掘り下げて行こうとする。

ジャコブの尺度＝ヤコブの階梯では [À l'échelle de Jacob] おそらく、同じものの夢のなかで、この梯子の頂上为天まで届いていて、天使たちが——ヤコブ＝ジャコブは天使たちに性があ

⁴ François Jacob, *La logique du vivant*, Gallimard, 1970, p. 330. [フランソワ・ジャコブ『生命の論理』島原武、松井喜三訳、みすず書房、1977年、305頁]

⁵ *Ibid.*, p. 317. [ジャコブ『生命の論理』293頁]

⁶ Derrida, *op. cit.*, p. 144-145. [デリダ『生死』136頁]

るのかどうか述べていません——ひっきりなしに登り降りしています。神は梯子の上方から夢想者に向かって、子孫が地上で塵芥の如く繁殖すると約束します。その前日だったかと思いますが、ヤハウエは彼にこう告げています。「汝、カナンの娘たちから妻を娶ることなかれ」、と。⁷

ヤコブは地上での子孫繁栄を約束されることとなる。これと不死の天との対比を考えると、無性こそが至高という言説を図式化したものとも読むことができよう。さて、この有性生殖／単性生殖の問題系は、「生死」講義において通りすがりの的になされたものではない。デリダはこの問題を、聖書の記述や生物学の書物内の記述にとどまらず、哲学史における問題として取り組むことを目論んでいた。講義と同時期に出版された『弔鐘』において、デリダは以下のように記述している。ここで重要なことは、ヘーゲルにとって家族の本質は親子関係、ひいては父子関係（*filiation*）である。

（キリスト教的）愛による家族は無限である。この家族はすでにして、思弁的家族とでも呼ぶこともできたであろうものである。さて、この思弁的家族は父／息子という親子関係の無限に循環する行程を辿る。欲望の、婚姻、内的な掟の無限性は父と子のあいだで保たれる。短い迂回を措いて、非本質性という些細な例外を除いて、思弁的な婚姻の本質は、そこから帰納しうるような体系的な帰結を伴いつつ、父と息子の結合を不滅のものとする。⁸

『弔鐘』では、母を経由する出産、ないしは生殖が「迂回」「非本質性」として形容されている。先のジャコブのバクテリアの増殖について注目するデリダは母細胞と娘細胞という女系の単性生殖を思わせる記述を引いていた。他方、先に引用した『弔鐘』での記述で焦点を当てられているのは男系を志向する思考だが、いずれにしても単性生殖をモデル化しているという点は注目に値するだろう。一方では、哲学がホモセクシャルを否認してきたことについてもデリダは『弔鐘』で指摘しているし、他方ではヘーゲルが『法哲学』末尾で展開している、有性生殖と死についての記述を読解してもいる⁹。さらに性的差異については『ゲシュレヒト』シリーズをはじめ、のちのデリダにおいて頻繁に論じられることとなるが、雌雄性＝性と生殖や死が重ねて論じられるのは、この講義録および『弔鐘』など、1970年代半ばに特有の問題系と言ってもよいかもしい。

『生死』講義に戻るなら、この死に脅かされることのない純粹な生を志向する思考において、性や死が代補となっているとデリダが述べる場合、ただそれらが生に付加されるものという意味ではない。むしろ、性や死が生を脅かしつつもその内奥で生を可能にするという意味で捉えられるべきだろう。デリダはそのように読める箇所をジャコブに見出している。例えばそれは、バクテリアが「死んでしまう」場合、それは「本来の意味での死」ではない、あるいはバクテリアが

⁷ *Ibid.*, p. 146 [デリダ『生死』137 - 138頁]

⁸ Jacques Derrida, *Glas*, Galilée, 1974, p. 44a.

⁹ *Ibid.*, p. 124a-135a.

有性生殖に似た仕方で増殖するときに、それは「真の雌雄性＝性行為」ではないとジャコブが述べている箇所である¹⁰。このような「本来の意味での」「真の」という表現は、ジャコブすらも性や死を前提としてしまっているとデリダは解釈しているのだ。この点については本稿の第4節で再論したい。

続く第6回では、この生殖と、テキストとしての生命との関係について掘り下げられる。

3. 第6回

第6回講義を始めるにあたり、デリダは以下のような言葉を引用する。

Par le mot « par » commence donc ce texte...

「よって」という語によって、それゆえにこのテキストは始まる¹¹

これは、デリダが好んで読解していたフランシス・ポンジュの「寓話」という詩の冒頭部であり、この詩は以後、「プシュケー」や『ポンジュを展開し説明する／ポンジュの襞を開く (*Déplier Ponge*)』などでも引用されることとなる。この一節は見ての通り、自己言及的な構造を成している。すなわち、「よって (par)」という副詞句を構成する語 (コンステイティヴな次元) が、実際に詩を始めている (パフォーマティヴな次元) という構造となっている。そして、この自己言及的な入れ子の構造が示す記述を、デリダはジャコブの『生きものの論理』のなかに二箇所見出している。すなわち

- 1). 「遺伝のメッセージは、その固有の翻訳から生まれる産物そのものによってしか翻訳されえない」¹²。
- 2). 「ゲーデル以来、ある論理体系が当の体系そのものを記述するのに十分ではないということが知られている」¹³。

である。これらの記述について、デリダは以下のように分析している。

この状況——すなわちテキストを註記するテキスト以外の参照項を持たないために、外的な参照項を、完全に外部にある参照項を持たないテキスト——は、結局のところ、遺伝生物学のテキストが置かれている状況なのではないでしょうか。¹⁴

デリダはこの構造に着目しつつ、ジャコブにおけるテキストと生きものとの類似性についてさらに読解を進めていく。ここでデリダが取り上げるのは、ジャコブにおける「モデル」という概念

¹⁰ Derrida, *La vie la mort*, p. 152. [デリダ『生死』143頁]

¹¹ *Ibid.*, p. 156. [デリダ『生死』147頁]

¹² Jacob, *op. cit.*, p. 326. [ジャコブ『生命の論理』301頁]

¹³ *Ibid.*, p. 337. [ジャコブ『生命の論理』312頁]

¹⁴ Derrida, *op. cit.*, p. 159. [デリダ『生死』151頁]

であった。例えばそれは、『生きものの論理』において次のように記述されている。デリダも引いている箇所である。

生物学の歴史において、理論と呼べるものはごく僅かだった。数少ない理論も、理論として長く妥当するためには、具体的なモデルに依拠しなければならないかのようだった¹⁵。

ここでの「モデル」とは、生きものの生殖を、工場における生産の比喩で記述することなどを指す。ただ、ジャコブは逆に機械について述べる場合も動物をモデルに記述しており、それを踏まえてデリダは『生きものの論理』において「モデル」という概念をめぐる循環が生じてしまうことを強調する。そしてデリダは以下のように述べて『生きものの論理』読解を締め括っている。

類比の問えないしはレトリック——モデルの問題系を支えているものです——を、内部そのものに、最終的にジャコブが生き物の内的な特性、すなわち自己を再生産する能力の内部と呼ぶものに導き直すのがよいでしょう。¹⁶

つまり、このモデルや類比という思考法こそが、生きものの生殖になぞらえられるというのがデリダの読解である。そして、この問題を踏まえつつ、第7回以降で論じられるニーチェにおける生物学主義の問題やハイデガーによるニーチェ読解への布石として、ジャコブの次のような記述を引用している。

知識が蓄積していくにつれ、人間は進化の産物のなかで初めて進化を支配できるようになった。関心を寄せる種を優遇することで、邪魔になる種を排除することで、他の種の進化を支配しているだけではない。自らの進化をも支配しているのだ。[...] 特定の個人——たとえば政治家、芸術家、美しき女王、アスリート——の正確なコピーを、思うがまま、望む数だけ作り出せるようになるかもしれない。[...] いずれにしても、独創性、美、体力などの複雑な質に関与する遺伝のファクターを知る必要があるだろう。そして何よりもまず、選択する基準に対して意見が一致することが望ましいだろう、だがそれは、もはや生物学だけの問題ではない¹⁷。

これを踏まえて、デリダは以下のように述べる。

生物学だけが関わるべき問題など存在するでしょうか。[...] 私はこれらの問いを、生物学主義の概念のほうに方向づけようと思います。すなわち、生物学的なものをモデルにすること

¹⁵ *Ibid.*, p. 162 [デリダ『生死』154頁], cf. Jacob, *op. cit.*, p. 22. [ジャコブ『生命の論理』15頁]

¹⁶ *Ibid.*, p. 174-175. [デリダ『生死』166頁]

¹⁷ Jacob, *op. cit.*, p. 343-344. [ジャコブ『生命の論理』318頁]

は正当なのか、そして生物学におけるモデルではなく、「生の - 論理の」[bio-logique] モデルについて論じることは正当なのかを問う概念のほうに方向づけようと思うのです。そしてこれらの問いの持ち筋の上で、ニーチェやハイデガー、フロイトのテキストに遭遇するでしょう。¹⁸

このようにして、ニーチェ読解へと移っていく。

4. 疑問点とディスカッションに向けて

筆者はこの担当回をめぐっての論点として、シンポジウム当日に次の二つの問題を提起した。第一に、このセミナーは大きなテーマとして、「再生産 (reproduction) とそこからの逸脱」という主題を掲げていて、それゆえに多義的な reproduction の意味の一つとしての生殖について論じているという点は十分に理解できる。しかしながら、このタイプの生殖論はその後、デリダにおいて見られなくなっているように思える。それではなぜデリダはこのような議論を展開したのだろうか、という点である。この点についてはディスカッションでは触れることができなかったが、仮説として、先にも触れた『弔鐘』のもととなったセミナー「ヘーゲルの家族」が 1971-1972 年に行われており、家族の問題や性の問題がデリダにおいて前景化していた可能性があることを挙げておきたい¹⁹。

第二の論点として、生殖と性についての関連としては、第 11 - 14 回でも論じられる『快原理の彼岸』におけるプラトンの『饗宴』に言及している箇所——そこでは雌雄同体のアンドロギュノスが逸話として登場する——や、『快原理の彼岸』第六章でフロイトが参照するヴァイスマンによるソーマ (非生殖細胞) / 生殖細胞についての議論についても関連があるように思える。しかしこれらの箇所に対するジャコブ読解との関連付けは、予告されていながらも、うまく回収されていないように思える。また、第 11 回でも登場する自由エネルギーの問題も、ジャコブ読解で論じられた内容からはクリアな繋がりがあるようには思えない。この問題は、第一の論点とのつながりで、1970 年代におけるデリダの思想形成について更なる調査の必要があり、別の機会に譲ることとしたい。

また、シンポジウム以後に考えた問題もここに付加したい。それは果たして単性生殖は死に脅かされることのない、純粋な生の形態と言えるのか、という問題である。

田崎英明はジェンダーおよびセクシュアリティについて思考するなかで、まさにデリダおよびジャコブが問題とする性と死が生に対して持ちうる影響について記している。田崎は生物学者のリン・マーギュリスおよびその息子で科学ライターのドリオン・セイガンの論を引きながら、生殖と性の関係性について述べている。マーギュリス+セイガンも、ジャコブと同様に生物を原核

¹⁸ Derrida, *op. cit.*, p. 180. [デリダ『生死』172 頁]

¹⁹ ちなみに、デリダの『生死』講義における reproduction の問題が教育と生殖の両面にわたることに注目し、デリダにおける家族の問題に関連づけた論考として、以下のものがある。森脇透青「誤配と「再生産」』『25 年後の『存在論的、郵便的』』読書人新書、近刊予定。

生物と真核生物の二つに分けて説明している²⁰。原核生物は、細胞核やミトコンドリアなどの細胞小器官を持たない生物である一方で、真核生物は、細胞核やミトコンドリアなどの細胞小器官を持つ生物である。両者は以下の二点において、大きく異なっている。

第一に細胞の構造である。原核生物の細胞は、細胞核やミトコンドリアなどの細胞小器官を持たず、細胞質の中に DNA が直接存在している。一方、真核生物の細胞は、細胞核やミトコンドリアなどの細胞小器官を持ち、DNA は細胞核の中に隔離されている。

第二に生殖能力において差異がある。原核生物の生殖は、細胞分裂や融合などによって行われ、雌雄の区別がない。一方、真核生物の生殖は、有性生殖と無性生殖の両方が存在し、多くの場合、雌雄の区別がある。

それでは、生殖能力と、真核生物にのみ存在するという雌雄性はどのように関連しているのか。一方で原核生物は、細胞分裂や融合によって生殖する。前者は母細胞が二つの娘細胞に分裂する生殖方法である。後者は、異なる細胞が結合して一つの細胞になる生殖方法である。デリダが注目した箇所²¹のジャコブも、こうした原核生物の生殖を論じていた。他方で真核生物は、有性生殖と無性生殖の両方が存在する。有性生殖では、雌雄の細胞が融合して受精卵を形成する。そして真核生物の無性生殖では、親細胞から子細胞が直接形成される。そして多くの真核生物は、有性生殖を行う。有性生殖によって、遺伝子の多様性が生まれ、生物の進化につながる、というのが定説である。

だが、マーギュリスは「^{セックス}性」についての新たな定義を行い、原核生物にも「性」が存在すると主張している。性は「二つ以上の源泉に由来する DNA の組み替え」であり、それに対して生殖とは「個体数の増加」である。性なしで個体数を増加させることができることばかり注目されてきたが、逆に個体数を増加させることなくセックス (=DNA の組み替え) をする、という現象が見られるという。すなわち細菌などの単細胞生物は、他の細菌の死骸やウイルスから DNA を取り込むことがあるのだ。これは別個体に由来する DNA の組み替えに該当し、そこでは個体数は増加しない。デリダのジャコブ批判、有性生殖を行わないとされる生物に「セックス」のようなものが見られるという指摘の枢要はここにあったとも言えよう。だが、デリダの批判にもかかわらず、こう問うてみよう。それでは原核生物のこうした「セックス」は何のために行われているのか、と。

この問いに答えるために、続くマーギュリスとセイガンの論を見てみよう。二人によれば、原核生物のセックスは紫外線によりダメージを受けた DNA の修復を目指すものである²¹。つまり、一般的には生殖は種の存続のためのものであり、そのためにセックスをするとされるのだが、そうではない。個体存続のレベルでセックスが要求されるのだ。こうした主張を受けて、田崎は以下のように述べている。

²⁰ デリダも『生死』講義において、ジャコブがこの真核生物／原核生物の区別に触れている箇所を引用している。Derrida, *op. cit.*, p. 151. [デリダ『生死』142頁]

²¹ リン・マーグリリス、ドリオン・セイガン『性の起源』長野敬、原しげ子、長野久美子訳、青土社、1995年、245 - 246頁。

私たちのような多細胞生物では、体細胞は細胞分裂は可能なものもあるが、性的能力（DNAの融合）は失っていて、それは生殖細胞（精子と卵子）に任されている。私たちの性は生殖（新たな個体の出現）に先だって行われるものにかぎられている。それだから、私たちはついつい性と生殖が切り離せないように思ってしまうが、生物学的にはこれは間違いであり、私たちがたまたま多細胞生物に生まれついたことからくる一種の偏見（多細胞生物中心主義？）にすぎない。²²

まさに、この田崎が仮に名づけているところの「多細胞生物中心主義」に嵌りこんでしまっている者こそ、『生死』講義のデリダではないのか。あくまでジャコブは、マーギュリスとセイガン（および彼らを引く田崎）の論じる筋を説明していたにすぎず、それに対してデリダは有性生殖を行う真核生物としての人間からの視点を投影していたのではないか。少なくとも筆者は「生死」講義をアーカイヴで調査していたとき、同講義の原書が発行されて読解していたとき、そしてこの翻訳を作成していたとき、それぞれの段階で毎回デリダの論述にどこか重箱の角をつつき、言葉尻を捉えているかのような印象を持っていた。無論筆者の読解力不足もあるだろう。しかし、拭いきれぬこの肩透かしをされたような感触は、デリダによる投影もしくは悪しきアナクロニズムのようなものが見られ、議論が噛み合わないまま進められた点にもあったように思える²³。

仮に、先に言及したヴァイスマンにおける生殖細胞と体細胞の区別を参照する『彼岸』へのデリダの注目が、田崎が観取した「多細胞生物中心主義」の括弧入れという視点のうえに据えられたうえで詳述されていたら、どうなっていたか。あるいは本稿の本文解説でも触れた『弔鐘』における有性生殖と死についてのヘーゲル的思考——そしてその背後に控えるバタイユのエロティシズム論へのデリダの眼差し——と関連づけられて、哲学における生と死と性の三者の関係についてのデリダの思考がさらに練り上げられていたら、どうなっていたか。このデリダ（とフロイト）の見果てぬ夢の続きは、現代生物学——エピジェネティクスなど、生物学における革命を知った現代——の知見を取り込んだ哲学²⁴を参照しつつ、別の機会に見ることとしたい。

²² 田崎英明『ジェンダー／セクシュアリティ』岩波書店、2000年、45頁。

²³ 田崎はその後、単細胞生物の「不死性」についても、セックスを行って若返りを果たしたところで、別個体になってしまったと捉えるなら単細胞生物として有限な生しか持ちえないということを生物学者の高木由臣を参照して述べている。田崎『ジェンダー／セクシュアリティ』51頁および高木由臣『生物の寿命と細胞の寿命——ゾウリムシの視点から』平凡社、1993年。この問題設定は、デリダや（少なくともデリダが読むかぎりでの）ジャコブが争点とする「死に補償されていない生」という前提そのものを覆すものでもあるように思われる。また高木由臣は後に有性生殖や寿命について、以下の書物を著しており、それぞれデリダの想定する前提とは大きく異なる視点が据えられている点にも注目したい。高木由臣『寿命論』NHK出版、2009年および『有性生殖論』NHK出版、2014年。

²⁴ カトリーヌ・マラブーは『明日の前に』で、カントにおける後生説（*épigenèse*）とエピジェネティクス（*épigenétique*）を論じながら、哲学における超越論主義を擁護しようとしている。Catherine Malabou, *Avant-demain*, PUF, 2014. [カトリーヌ・マラブー『明日の前に』平野徹訳、人文書院、2018年]

デリダが想定していたジャコブ——実のところこの批判自体がクリティカルでないことはすでに示したとおりだが——、誤読された「ジャコブ」なる人物における純粹化された生命を、すなわち変化に脅かされることのない生命を求め、同じものの再生産を希求する思考の影には、父に回帰せぬ私生児が、不気味なものとして抑圧され潜んでいるはずだ²⁵。デリダと面識のない東洋の一人の学徒がこの見果てぬ夢の続きを見て、途絶されたプロジェクトを批判的に引き継ぐこと、思考の私生児となること。それは一種の思考の散種であり、思考の生き延びであり、とりもなおさずデリダがこの講義で試みた **reproduction** であろう。

²⁵ このデリダによる講義録はジャコブ批判としては不発だったものの、純粹なるものが不純なものを抑圧しつつ、自らの内部に含んでしまっているという事態はデリダが一貫して指摘してきたものであったことは言うまでもない。